

Title	社会思想家としてのジョン・ラスキンの生涯 (六、完)
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.6 (1923. 6) ,p.945(123)- 962(140)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230601-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の考へて、一國民衰退の不吉なる兆候とする所です。氏に云はせれば、佛國は此道程に於て英國よりも遙かに前進して居ります」と。(Ibid., p. 322)

右を以て一八五九年の日記に於て Mill に關説する所が終ると共に、是れが Fox 女史の遺稿に於て Mill に關説した所の最後である。以下原本には、一八六〇年五月二十五日乃至一八七一年一月五日の日記が引用されてあるも、Mill に關説する文句は全然見受けない。

十三

以上の如く私は、Caroline Fox 女史の遺稿中より John Mill に言及せる所を細大洩らさず紹介した。其結果私の會得したことは、女史の筆を通じて傳へられる所が Mill の前半生、詳言すれば大體に於て「自叙傳」第六章までの縮圖であると謂ふのに在る。唯だ彼の學説を充分に

窺ふことの出来ぬ丈けが遺憾である。加之、女史の遺稿は、専ら日記より成るが故に、女史の執筆するまでに談話の記憶違ひも生じたであらう。強ひて難ずれば、是等が其缺點であることも云へる。併し其中には Mill の性格が明確に表はされて居るを以て、Sir Leslie Stephen が嘗て「Mill の自叙傳は無味乾燥である」と云ふやうな批評を下した所も、斯る記録の出現に依て相當に色附けられることを思ふ。(Sir Leslie Stephen, the English Utilitarians, 1900, vol. III p. 70)

斯の如き意味に於て Fox 女史の遺稿は、單に John Stuart Mill の研究者に取てのみならず、又女史と親交ありし Thomas Carlyle や John Sterling 等の研究者に取ても貴重なものであると信ずる。

最後に私の特に氣附いたことを一二記して、本稿を結ぶこととする。先づ屢々引用される

(L. L. Price, A Short History of Political Economy in England, 9th. edit., p. 87.) (完)

社會思想家としてのジョン・

ラスキンの生涯 (六、完)

奥井復太郎

二十

John Stuart Mill の座右の銘「今に働けない夜が来る」(the night cometh when no man can work.) には「今日も明日も日に働け」(work while it is called to-day.) と云ふ前置があること、其一である。(A. Bain, J. S. Mill, p. 159; Memories of Old Friends, p. 91) 其二は、Caroline Fox 女史の遺稿を通じて觀たる John Stuart Mill が、其著「經濟學不定問題論集」に於て「經濟學以外何物をも研究せざる經濟學者は、彼の學問を實際に應用しやうとしても、失敗するであらう」(J. S. Mill, Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy, 2nd. edit., 1874, p. 151.) と論じた所に、ピットリと當嵌ることを是れである。洵に Mill は、終生を通じて斯の如き言説の實行に努めたればこそ、L. L. Price の言ふ如く、十九世紀の後半に於て英國人の思想に深く且つ博き影響を及ぼすことが出来たのである。

Ashmore Wingate によれば『近世畫家論』は其の關係せる方面に與へた影響の甚大なる點に於て、其の出版の年を Contract Social. Wealth of Nations. Origin of Species. Sartor Resartus. Analogy of Christianity 並びに The first Oxford Tract 等のそれ等と同じく記憶す可き價值を持つものである。(Cf. Life of John Ruskin, pp. 44-45) 一八四三年と云ふ年は『經驗の少なき、併し窮りなく又遠大なる才能を有し、且つ彼等が

65 Cornhill. 1843.

神の如く敬ふ見解を駁撃し、然かも遂に其を征服するに到つた、一青年を社會に送り出して之れを驚嘆せしめた年である。』(Ibid, p. 43)

斯くの如き意義を有する『近世畫家論』第一卷はクラウン・オクダヴォ大剣四百五十頁の書物にして、其は、一八四三年五月初めの週間に A Graduate of Oxford なる匿名の下に出版された。其の表題紙には次の如く書かれてあつた。

Modern Painters : | Their Superiority | In the Art of Landscape Painting | To all The Ancient Masters | proved by examples of | The True, the Beautiful, and the Intellectual, From the Works of Modern Artists, | especially | From those of J. M. W. Turner, Esq., R. A. | By a Graduate of Oxford | [Quotation from Wordsworth] | London : | Smith, Elder & Co.,

而して同時に英吉利風景畫家への獻本の體裁をとつてゐる。斯くの如き長々しき表題を附する以前にラスキンは Turner and the Ancients なる書名を希望したが其は出版者の反對によつて變更せられその希望を僅かに上記表題の一部に現はし得たのである。

右表題紙中の Wordsworth より引用はラスキンが此の著述に於ける彼の自信を語るものと考へらるゝなる (Cf. Library edition, vol. II, p. xxii. E. T. Cook - The Life, vol. I, p. 132) 其は "Excursion" より引用であつてその全文は次の如くである。

"Accused me not
Of arrogance.....
If, having walked with Nature,

And affered, far as frailty would allow,
My heart a daily sacrifice to Truth,
I now affirm of Nature and of Truth,
Whom I have served, that their Divinity.
Revolts, affended at the ways of men,
Philosophers, who, though the human soul
Be of a thousand faculties composed,
And twice ten thousand interests, do yet prize
This soul, and the transcendent universe,
No more than as a mirror that reflects
To proud Self-love her own intelligence."
二十四歳の若きラスキンが極めて強き自信は更に此の詩句の外に窺ふ事を得る、其は彼が Rev. H. G. Liddel (Oxford Christ Church の希臘語の教師) に與へた一八四四年十月十二日附の手紙である。

『(前略) 實際タアナアに就いて、私は外の人

々よりも一層正當に判断し得ると考へる根據を、自分の教育中に求め得なかつたとしたならば、かくも大膽な事は決して云へなかつたらうと思ひます。其れは私がまだほんの子供のうちから、景色の、山嶽地方に連れられて行たり、又他の子供が普通文典の勉強をしてゐる頃に、Como や Lucerne の岸邊を逍遙する事が出来たり、更に、従つて通常旅人の注意を惹くもの、例へば美術であるとか、古蹟だとか、又は民俗であるとか云つて凡べてのものに無頓着で、純な、野生の寂莫たる大自然の風光に夢中になつてゐたりした爲めであつて、勿論一般的知識とか、世間的の知識等に關しては極めて不幸な結果となりましたが、併し神が造られた凡べてのものに於ける美と云ふものに對する特殊の感受性——其の感受性をもつと普遍的にしよとすることが私の現在の目的であります——その感受

性の上には最も有益な効果を與へたと考へられ
た(後略) (Library edition, vol. III, Letters
on "Modern Painters," p. 669. Cf. *Ibid.*, p.
xxii. Cook—The Life of Ruskin, vol. I, p. 132)
(註)

註 併し此の手紙の中には更に次の様な文句がある
『私の書いてあるもの多くにあの様な大威張りの風をつ
けたのは私の自信からではなく、たゞ熱誠と強い感情とが
らなのです……』併し何人も彼が此の熱誠と激情と更に大
自然のインスピレーションから得た自信とを合せ有し其が
かの傑作を生み出すに至つた事を認めるであらう。

次に『近世畫家論』の準備時代とも考ふ可きも
のは彼の幼年時代よりオクスフォード時代に到
る約二十年間が正しく其れに該當するものであ
る。

『向後、彼の進路は決定した、彼は遂に自己の
天職を見出したのである。彼は詩人たる可きで
は無かつた。其は彼が力めて忘れ去らんと欲せ

來た彼の前生涯に於いて極めて充分に用意せら
れてゐたのである。(E. T. Cook が Library
edition, vol. III. の緒言、一九一三頁に於い

て述ぶる所、此の意味に於いてある) Modern
Painters の「第一章」である一八三六年の Black-
wood Magazine への抗議は形式上の一前奏に
過ぎぬであらう。又文筆の力に關しては彼の云
へるが如く、彼は云ふ可きことを有せざる以前
に既に、云ふ可き業を修得し得てゐた (Cf.
Library edition, vol. III, p. xx. "My First
Editor," in On the Old Road, s. 7) 美術に關す
る彼の知識は、その進歩の結果、彼をして後に
先きの所論を改訂するの必要あらしめしと雖
も、尙ほ充分なる觀察力によるものがあつた
(Cf. Library edition, vol. III, p. xx) 併し最も重

要なる特徴は彼の自然に對する觀察とその愛と
である。是等に就いては既に前三回に亘つて述

る過去と、又彼が拂ひ落さんと望める美術の因
襲とに極めて密接なる結果を有せるものであ
る。又彼が彼等に教ふるを以て自己の天職なり
と感せるに、彼等民衆を悦ばさんが爲めに他と
競争しつゝある藝術家たる可きでも無かつた。
又科學者たるべくもなかつた、蓋し彼の植物學、
地質學は彼の教訓の手段たるべくして目的たる
べきものではなかつたから。彼の使命は、生活の
他の方面に於けると均しく、藝術に於いても其
の「真人」(Heroes)を有する事、而して彼等の努
力の原動力は「眞摯」にして彼等の言葉の要諦は
「眞理」なる事等を世界に告げるべく彼の上に置
かれたのであつた』(Collingwood, vol. I, p. 103)
Norwood 並びに Fontainebleau に於けるラス
キンの得悟、其は彼に自然に對して眞摯謙讓な
れど教ふるものであつた。自然と藝術との使徒
としてのラスキンの使命は、既に觀察せられて

べて來た所であるが、ラスキン自身は次の如く
云ふのである。

『余の生涯に於ける、美術に關する全部の正し
き仕事は美術の愛によつて始まりしに非ずし
て、山嶽や海に對する愛によつて始まつたもの
である。……余は Cumberland 丘岡の逍遙に、
或は低き砂地に寄する海波の線の觀察に全くそ
の目を費すのであつた。……而して余が美術上
に於いて得たる、又今日に於いてはそを用ひ或
ひは傳達する事に於いて自信と幸福とを有す
る、判断力の如何なるものも、主として當該物
象に就いて常に探究し美術を以つて其を表現す
る一手段と認めたる堅實なる習性に基くもので
ある』(Cf. Library edition vol. III, p. xxii.
Eagle's Nest, s. 14)

故に其の傑作『近世畫家論』第一卷に先づ
顯示せられたるラスキンの才能に就いては

Collinwoodの次の解釋を正しいと考へる、即ち

『近世畫家論』は通常、一天才の齡若きも圓熟せる、錯雜せる内にも説明し難きものを有せる天才の急激なる發現として觀察せられ、又福音として容認せらるゝか或は異端者の怒號として非難せらるゝと云つた様に觀察されて來てゐる。併し吾人は、此の著作が興味ある發展中の唯一挿話に過ぎぬと云ふ事を認めなければ、此の著者の生活を調べて行く事は不可能である。次第々に吾々は此の所に導かれて來たのであり又均しく徐々に此の點から導き去られるであらう。吾人は其の製作の境涯を、よりよく理解する事によつて更によく、其を尊重し判斷して其の中に存する永久的性質を保持し得るであらう。』(The Life and Work of J. Ruskin, vol. I, p. 98)

二二

した。そして更に、此の高い職分を示導する事、不注意なる寫生や因襲的な構圖法を向上させて研究に富んだ教理、靈感から生れた詩とする事は私の最大の勞働に價する一目的であり、又遠大なる、生涯を傾倒するに足る目的であると信するに至つたのです。』(Library edition, vol. III, p. 666. Letters on "Modern Painters.")

ラスキンの所説の眞義を解するには彼が『近世畫家論』の一編を草して敢然戰鬥を開始した、其の當時の思潮及び傾向を理解する必要がある。其は又同書の出版をラスキンの父が最初に託せんとした出版業者 John Murray の之れを拒絶せる口實に就いて知る事を得る。『近世畫家論』の出版所は Smith, Elder & Co. であるが之れより先、ジョン・シエームスは John Murray に其の出版を依頼した併し後者はタアナアに對する世間の興味が當時少ない事と、更に寧ろ獨

併し『近世畫家論』の直接動機は一八三六年と同じくタアナアに對する前述の批評であつた。(一八四二年の事。H. T. Cook は一八四〇—四一年の旅に於いてラスキンが友人の Clayton に與へたる手紙「Letters to a College Friend」の一つで『完成には數年を要する、勞作を始めてゐる』と傳へた事から此の時既に此の著述がある形に於いて彼の心にあつたものと考へてゐる。Cf. Library edition, vol. III, p. xxiii) Chamouni に於ける生活や『近世畫家論』の計畫に就いては既に述べた通りである先きに揚げた Osborne Gordon に與へた手紙の中には又彼の著作の意向が明確に窺はれる。『そこで、風景美術の眞の目的は何であるか云ふ疑問が起り更に、其れが全く墮落し、又誤られてゐると云ふ事、之れを以て偉大なる道徳的力の道具となしうると云ふ事等の確信を得ま

逸派に對しては著者の見解を社會が希望してゐる風があると云ふ點を以つて Turner and the Ancients を引き受ける事を拒んだのである。(Cf. Library edition, vol. III, p. xxxii)

當時タアナアに對する人氣が餘り大でなかつたのは事實である。誠に彼の名がラスキンの名と共に結びつけられて記憶せらるゝ理由は充分あるにも拘らず、然かもタアナアの名はラスキンのそれより既に早く社會に認められてゐたのである。タアナアの名がラスキンに負ふ所はその名、發見せられしに非ずして寧ろ彼の名に賦與せらるゝに至つたその眞價にあるのである。

ラスキンがタアナアの作品に於いての力強き感銘を見出したのはその晩年の作に於いてあり又其等に對する社會は寧ろ冷淡且つ無理解であつた。換言すればラスキンが信じて「眞のタアナア」となす所のものに對して社會は其の價値

を認める事が出来なかつたのである。(此の點に關しては Præterita, II, §§ 71, 73. Diary, May 10, 1843. Stones of Venice, vol. I, Appendix 11. Art Criticism (letter to editor of "The Artist and Amateur's Magazine"), January, 1844; edited into Arrows of Chace, vol. I. The Preface to the 3 ed. of "Modern Painters" vol. I. Cf. Library editions, vol. III, p. xxxiii)

此の頃に於けるターナーの作品は從來の手法構圖等に於ける因襲を無視し、自然の眞美を彼が心胸に映するがまゝに極めて自由且つ大膽に描き出したものであつて、因襲的な批評家が従つて "out of nature" なる批評を彼の上にした所以である。ラスキンは此の點に於けるターナーの力を認めるが故に一八四三年の『近世畫家論』の第一卷は當時の社會の因襲的傾向に對する、近代的挑戰の一つであつた。

のものは普通に見る單なる狂文の類に非ずして、極めて觀察に忠實であり分析的な又推理的能力に富んだ學問的批評とし其の獨創的、永久的價値を有するものである。

故に此の點に就いては當時の文學界の人々をして、嘗て見た事のない程健實なる基礎を持つる美術批評と稱賛せしめた。(Sir Henry Taylor が Aubrey de Vere に此の書の購讀を勧めたる手紙參照 Collingwood's Life of Ruskin, p. 94 quoted by E. T. Cook in Library edition, vol III, p. xxxviii) 又ラスキンの所説が、心情を養ふ力ある點に於て、他の科學的眞理に關する著作よりも更に貴重なるものであるとなす、Brighton の Robertson が、此の書の閲讀に熟讀の必要あるを、人に説きたるが如きは何づれもラスキンの著作が如何に健實なる基礎と堅固なる推理とによつて纏められてゐるかを窺知するに足る、

『彼は權威を排して、本理に注目する。』美術家は何であるか』彼は如何なる法則を例證するか』彼の目的とする所はそも何か』と彼は問ふ。斯かる間に答ふる爲めに、ラスキンは、誠にその稱入らるゝが如く、近代的精神に於ける一般的批評の、最初の著名なる著作」を生み出し「凡俗主義と偏見に對する戰鬪の先驅者となり、旗手となつた」のである。"But where is your brown tree?" 又は Sir George Beaumont が Constable に對する質問であつた Sir George は昔のある畫家達の調子にのみ合つた眼を以つて繪を眺めた。ラスキンは自然に注目し、自然の眞理の光によつて繪畫を考ふ可き事を吾人に教へたのである。』(Library edition, vol. III, p. xxxiii)

故にラスキンの説く所、其の當時にありては異端者の所説と思はれたであらうが彼の批評其

(Cf. Library edition, vol. III, p. xl or E. T. Cook's Life of Ruskin, vol. I, p. 139)

かく『近世畫家論』の第一卷に於いてラスキンが開陳せる美術批評の特色は其の所論の大膽なると共に著者の權威的自信である。然れ共最も多くの注意を惹きたるものは、確實なる推理と、豊富なる考證引用と、文筆の雄渾並びにその美、更に驚く可き忠實なる自然觀察である。

ラスキンの此の著述に對する自信に就いては既に述べた。推理、考證、文才、觀察等に關しては、Browning 夫人を始めとして他の評論家を注して、著者が批評家なると共に詩人なる事を注意せしめ、Sara Coleridge 並びに他の雜誌記者をして自然觀察の微妙と其の記述の美とを嘆せしめ、更に文章の妙と美とに依つて評論の無味乾燥を巧みに脱却せしめたる手際が稱賛せられてゐる。或は評論家をして、著者の繪畫に關す

る原理並びに技術的才能の優秀を稱賛せしめ或
ひは美術に關する哲學的にして且つ實際的なる
論文と評せしめた。又は傳統的偏見の迷蒙と謬
想に超して高翔するを得る、非凡の精神を認め
しめ、是等に對して廣く挑戦せる大膽なる著述
の大膽なる表題に吃驚せしめ、更に其の異端者
的所説の勝利を確信せしむるものがあつた。

併し最も興味あるは此の著者を既に豫言者的
使命を有せる偉才として看破したる Mrs. Gas-
kell, Charlotte Brontë, George Eliot 等當時の女
流作家の見解である。Brontë をして美術に對
する觀察眼を開かしめ、更に著者が「心地よき
稱賛者」なるを感せしめ、進んで彼女は彼の深
遠にして、眞摯なる、且つ所謂熱狂的、美の尊
崇に對して苛ら立てるユテイリタリアンを嗤
ひ、彼を以つて形而上、理想を説く牧師なりと
してゐる。George Eliot をしては、時代の偉大

なる一教導者と尊敬せしめ、更に彼女は美術に
於ける眞理と眞摯との、人間生活の尊貴と嚴肅
との、偉大なる教理をハイブルウの豫言者のイ
ンスピレイションを以つて説ける彼は若き心を
激勵せしむるものであるとなす。

畫家に對する反響は Hodgson をして美術界
に對する新しき福音として顯示の光を投ずるも
のとなさしめ、Holman Hunt をしては其の書が
彼自身の爲めに書かれたるに非ざるやを疑はし
めた。『近世畫家論』の中に論せられてゐる當時
の畫家に就いてはラスキンの自叙傳第二卷一七
一節參照。以上の諸家の批評に就いて詳しくは
Library edition, vol. III. Introduction (pp. xxxv-
xli) 當時の斯界の權威である Sydney Smith が
ラスキンの著書に與へた折紙に就いてはラスキ
ン自叙傳第二卷第九章一六五節參照)

Turner 自身に對する影響は勿論其が彼を喜

ばしたのは明かであるが(一八四四年十月二十
日のラスキンの同誌參照 Library edition, vol.
III, p. xli) Turner の傳記々者である Thornbury
は、之れによつてタアナアの、忘失せられんと
してゐた作品が再び社會に認められ、臆病なる
タアナア信者は一層大膽となり彼の敵は漸次鳴
をひそめて行つたと書いてゐる。(Life of Tur-
ner, quoted by E. T. Cook in Library edition,
vol. III, p. xli) 併しタアナアは、彼に共鳴者を見
出し彼を尊重したるラスキンの所説が遂に社
會の因襲的傾向を壓倒して赫々たる勝利の光榮
を荷ふに至れる時を見ずして死んだのである。
(Cf. Ibid.)

ラスキンの著書が傳へたる影響中最も尙ぶ可
きはラスキンの所説の精神である。ラスキンの
この精神的後繼として(勿論更に多大の獨創と
又純然たる藝術家的氣質と更に新しき時代に對

する見解とを具有せるが)茲にウイリアム・モリ
スを見出す事が出来る。Pre-Raphaelism の領
袖であつたホルマン・ハントが夜遅く燈の下に、
『近世畫家論』の一言一句に牽かれてその更ける
をも知らざりし光景は誠に E. T. Cook の言葉
の如くヴエクトリア時代の文藝史上の劇的の一
場面である。モリス、バアン・ジョオンズはオク
スフォード以前に於いて屢々ラスキンを讀んで
ゐた。『近世畫家論』こそモリスにとつてはかの
『ヴェニス石』の一章『ゴシックの性質』以上に
感動を與へたものとせらるゝ。彼等にとつてラ
スキンは、真人であり、豫言者であつた。かの
莊重なる美聲にてモリスが『近世畫家論』を朗詠
する時其處に表現せられたラスキンの思想は最
も力強い印象を周圍の者に與へた。ラスキン、
モリスの名は、吾々の耳に彼等の精神を通じて
最も快よく響くのである。(Cf. E. T. Cook—The

Life, vol. I, pp. 147-148. J. W. Mackail - The Life of William Morris, vol. I, pp. 40, 49, [Pocket Library edition]

二十

然し乍ら、一八四三年の當時、ラスキンの所論は直に其の批評界を風靡したものと考へる事は出来ぬ。Modern Painters の第一巻は其の賣行極めて遅かつた。著者の自認するが如き「異端」の見解が(同書第一版序文参照)社會を悉く風靡するには相當の期間を経ねばならない。同年再び Turner に加へられたる批評は、今や Turner の讚美者である此の若き批評家の上にも轉せられた。其ほかの Blackwood Magazine と Athenaeum の兩誌を通じて現はれた、是等の評論雑誌の嘲弄はラスキンをして應戦せしむる事となつた。一八四四年三月三十日の『近世書家論』第一巻の第二版に對する序文は此の目

的の爲めに是等の評論に嘲弄の返報をなすべく同月十四日書を上げられたものである。(Library edition, vol. III, pp. xlii-xliv 及び其の脚註に於ける同月の日誌参照) George Richmond

をして其の破壊的な批評は恰も惡魔の如くに叫ぶと云はしめた(Cf. Cook - The Life of Ruskin, vol. I, p. 143)ラスキンの鋭き攻撃は、既に論敵の陣營を覆へしてしまつてゐた。即ち彼自身は第一巻の著作の成功が四十三年の終りには確然たるものがあつたと認めざる(Cf. Praeterita II, p. 82)故に第二版の序文は眞理の把持と勝利の確信の下に更に大膽に書かれてゐる。

併し毀譽褒貶は、彼本來の針路に進めるラスキンを止め、之れを轉換さす可くもなかつた。彼の仕事の一段落は更に新しい仕事への刺戟となつた。彼自から云へる様に一八四三年の著述は彼の計畫の一部分に過ぎない(第一版序文參

照)故に彼は直にその續稿の計畫と執筆とを企ててゐたが此の第二巻を充分に用意する爲めに(其の第二巻の計畫は、實際現はれた第二巻とは殆ど似よらぬものであつたらしい)(註)更に多くの Chamouni に於ける研究を必要とした。之れが爲め一八四四年又もや大陸旅行が企圖された。(Praeterita II, p. 82)

註 ラスキン自身は高々此の大著述を二、三年内に完成する心算であつた。(Cf. Letter to Rev. O. Go-don March 10, 1844)勿論第二巻はその計畫に對しては上に述べた様な變化を生じてはゐるが又此の事は後に詳しく述べられるが大體に於いて第一巻に於ける「美術と眞理」との關係は、進んで第二巻に於いて「美術と美」との關係に發展してゐるのである。が其の企圖であつた二、三年は遂に全部完結する迄に前後十七年の長きを要した。(Cf. Cook - The Life, vol. I, p. 154)其の間、更新され、増補されて行く知識に忠實なラスキンは計畫は勿論、所論、結論の或部分を狐疑する所なく改變し、行つたのである。本誌前號の拙稿に於いて述べたるラスキンの知識の發展は之の關係を指すものである。(本年二月號八六頁參照 Modern Painters の第一巻の諸版に於ける重要な相違 - 關しては Library edition,

vol. III, pp. xlv-xvii 及び其の以下を參照せられたし。

一八四四年の旅行に於いてラスキンは, Rou-en, Geneva, Chamouni 等を訪れた。此の旅行は彼の仕事の酵母となる可きものを可なりに供給した。(E. T. Cook - The Life, vol. I, p. 161) 『吾々は一八四四年六月一日にゼネバに到着した、そして Chamouni に於いて一ヶ月滞在する計畫を立てた。... 私は今や植物學的の正確を以つて書く事の出来る程になつてゐて又最高の仕上げに及ぶ位に精密な色彩を加へる事が出来た。又あらゆるもの、雲から地衣 (lichen) に到る凡べてに興味を持つた。ゼネヴァは私にとつてより、大なる驚異であつたしアルプスは前よりも激洩たり又莊重であつたし Chamouni はより平靜であつた』(Praeterita II, p. 93) 大空の觀察に彼は又貴重の時間の大部分を費した。プレテエリタの中のラスキンは其が生み出す所の

有益なる結果も彼にのみその利益が認めらるゝのであつし『現在の煤煙にどざされた世界』の他の人々にとつて、何等効果を及ばさぬものであると嘆じてゐる。(Cf. *Præterita*, II, s. 94)此の頃に於いて『近世畫家論』の第二卷の計畫は彼が全く他の異つた方向に向つた爲めに中断されてゐたらしい。

『反對に私は全く他の問題に就いて懸命に、又緻密な研究をやつてゐた、其は今やアルプスの本草學に就いて書きたいと云ふ希望と、残つた自分の時日はアートル草や雲母片岩を描く事に投じ様と云ふ心を感じた。タアナアの魅力は勿論以前の如く強いものがあつた、併し私は他の色々の力が今や私の側に來てタアナアの其の外に、否彼のそれを越へて、私に囁くのを感じた、其は喜悅に關するものではなくして、生命的力に於いてであつたとして是等のもの、境域

を探つてしまはない以上はタアナアに就いて一言も書く事は出来ないと感じた (Ibid., s. 100)

同年八月巴里に立寄つて彼は Louvre へ行つた。此の時のラスキンは伊太利美術に對して一八四〇年羅馬に於ける彼ではなかつた。自叙傳第二卷第一〇一節以下は彼のヴェネチアン藝術に對する理解の進歩を述べてゐる。此の進歩の動機は彼の記憶によれば恐らく一八四二年 Rogers の家に於いて George Richmond に與へられた教訓に基くものであらう。その教訓の結果に就いてラスキンは次の様に書いてゐる。

『最早それ以上を必要としない。其の瞬間から私はヴェネチアン繪畫の色彩が何を意味するかを知つた。併し一八四三年並びに四四年の早々は「近世畫家論」や學位を得る事業や前景の研究に没頭してゐた爲め是等の、次に載せた日誌の記録によつて示さるゝ様な點に私の繪畫上の

知識がどうして到達したか理解する事が出来なない。殊に其の記録の最初のもの (註) (八月十七日のもの——筆者註) 此の知識の増加が其の時私を吃驚させた事を示してゐるが、愚にも其をルツブルに於いて突然その瞬間にやつて來た變化の様に認めてゐて、其を成長の結果と認めないでゐた。思ふに事實は自然に於ける眞の色彩を眺めてゐた習慣が、繪畫に於ける色彩の穩當と莊嚴とに對して、そが私にとつて魅力を有する以前に、私をして感ぜしむる所があつたのであらう。(Præterita II, s. 102)

註 八月十七日の日記は次の様な事を誌してゐる
『今度ルツブルへ訪れたことによつて自分の上に一つの變化然も強い變化を生ぜしめる事となつた。そして主として Titian, John Bellini, Perugino 等の完全な理解と、彼等の爲めには他のあらゆるものを捨てる事、否その以外のものは觀る事を不可能ならしめた事等に於いてその變化がどの位進むものであるかてんでわからない』

故に一八四四年の夏の勞作はラスキンをして

『近世畫家論』の續稿よりも美しい植物學や六づかしい地質學や又ルツブルに於いて刺戟をうけた人體研究の方面に追ひ込んだ。是等はラスキンをして教會史を研究する事に到らしめ、十四世紀の繪畫の功績を認めると共にヴェネチアン派に對してルーベンス、レムブラント等の全然の放棄を意味する事となつた。

『其は、單に色彩の感覺に於いての進歩のみでなく、光と陰との眞理やその中庸を認めし點に於ける進歩である事を讀者は認めて頂きたい。家へ戻るや私は混亂せる新知識の旋風の中で先づこれからさきに確めなければならぬと感じた。』 (Præterita II, s. 104)

従つて一八四四年から四五年にかけての冬は、彼の著述の進行を殆ど見なかつた。寧ろ彼は光と陰の原理、其の實際に就いての充分なる努力を拂ひ明暗法によつて自然から精密に學ぶ

を得る様に成り得た。かくして又一方には伊太利藝術に關する、知識を求める爲めに Rio の Poetry of Christian Art (De La Poésie Chrétienne dans son principe, dans sa matière et dans ses formes: Paris, 1836. English version, 1854) を讀む事によつて從來の蒙を啓き、かくて少くとも『近世畫家論』に對して新しき一言一句を書き出す以前にピサ、フローレンスを再び訪れる必要を痛感した。(Cf. Praeterita, II, § 104) 之は一八四五年の伊太利旅行の動機であつて、此の旅行は『第二卷をしてあるが儘の形にあらしめた決定的の要素であると共に彼の生産の一轉機となつたものである。』(F. T. Cook—The Life of Ruskin, vol. I, p. 168) 註

註 後に述べらるゝが如く『近世畫家論』第二卷は第一卷と比較して其の内容に於いて著しき相違を示す、其は即ち一八四五年の旅行が著者に及ぼせる影響を示すものである。此の旅行がラスキンの生涯の一轉機となつたを考へ

『近世畫家論』第一卷は未だラスキンの生涯の決定的時機ではなかつた。『吾々は既にラスキンが此の著作の繼續を以つて單に時間潰してあつて殆ど片手間仕事の様に説いてゐるのを聞いてゐる』。『彼の生涯の主たる事業が何人であるか』云ふ事は未だ纏まらぬ疑問であつた。一八四四年の旅行は遂にこの疑問に答ふるものではなかつた。』

既に述べた様に一八四四年の旅行は併し乍らラスキンに一八四五年の旅行の動機を興へたものであつた。而して一八四五年の旅行の意義はラスキンが人間の手になる美術の界隈についてその全意義を解し、又彼が其を認める事に於いて特殊の才能を賦與せられたるを自覺して遂に自然の解説者より轉じて(不寧ろその責務に加へて)藝術の尊貴をこく解説者としての新しき使命に應じて立つた所にあるのである。(Cf. Library Edition, vol. pp. xxiii-xviii)

勿論此の最後の意味に於いて觀察すれば一八四五年は明かにラスキンの生涯の一大劃機である。筆者も其の點に就いて異議を挿む餘地を見ない。唯疑問なのは『近世畫家論』第一卷の仕事繼續する事を以つてラスキンが單なる時間潰し、片手間の仕事と考へたか否やである。Cook 氏の論據とする所は一八四四年三月十日の O. Gordon 宛のラスキンの返信によるものである。(Cf. Library Edition, vol. IV, p. xxiii) 又此の手紙は Same edition, vol. III, pp. 665-667 に

載せられてゐる。故に問題は此の手紙の解釋に存するのであるが、筆者の解し得る所幸にも誤讀誤解のない限り、前記の Cook 氏の所論、聊か早断の譏あるを免れぬ。

此の書面は其の内容よりして、Gordon がラスキンに加へたる非難(或は言葉が稍々強すぎるかも知れないが、——『近世畫家論』の著述に就いての)に對して答へたる反駁書である。加へられたる「非難」の大意は、趣味の滄養と云ふ事が人の(或はラスキンの)生涯の仕事とすべきものなりや否やの點にあるらう。(Well, you ask me, if the cultivation of taste be the proper "erron" of a man's life, and you desire me to consider the matter as a thesis, separate from my own case) 之れに對するラスキンの回答は三つの點に存してゐる。(一)彼の目的は、自己の批評的才能を磨るに非ずしてあらゆる階級の人々に、美術の愛と知識とを普及せしめんとするにある事。(二)彼の傳へんとする所の愛及び知識は、技術的専門上又は人々の氣まぐれに就いてでなくして、寧ろ美術によつて解脫され鞏固にせらるゝ、自然の一般的體系に就いてあり、(三)彼の傳へんとする所は高々(at the very utmost)二、三年を以つて完成しうるものであると考へらるゝ、従つてラスキンは二十四

歳より二十七歳に亘る年輩に於いて之れ以上意義ある仕事に従事しうる他の者ありや、と云ふ様な口吻を漏してゐる。然らば二十七歳以後は如何と云ふに其は彼の語り得ざる所

であつて、彼は其の以後如何なる義務を爲すべきやに就いては Gordon の忠告を待つと述べてゐるが七ヶ條に亘つて彼の氣質を列記し、勿論彼の將來は其の特質の中より造り出さるべきも其の各項が如何に彼の宗教上の將來を怪しませるものであるかを悟らしめんとしてゐる。更に最後には、彼の感受性は色彩、形體の美に對して鋭く、又純真にして簡素なるものを愛するものが彼の特性であるが又、神は各人に或る才能を賦與して、彼等に特殊の職能を果さしめんとするが故に、ラスキンに於いて本能的強さを有する、丘岡や水流に對する好みは他日之れに對して逆ふ可く、與へられてゐることは思考し難いと結んでゐる。

以上若し筆者の解する所に誤りなくんば彼ラスキンの手紙の略ぼ大要を示し得たつもりである。此の意味に於いて筆者は、ラスキンが何等『近世畫家論』の第一卷又は其の繼續に於いて Cook 氏の云へるが如き Praeterita 又は Here painting of the time を觀ぜざる點なきのみか、寧ろ彼は彼の仕事は彼自身の個性の然らしめた所であると感してゐると、認める者である。勿論二、三年の計畫は遂に一生の計畫となつた。併し其はラスキンの知識の必然的發展であり又彼が此の宇宙に於ける神の創造物に就いて認めたる、眞美、或は善を他の人々に告げ知らせんとする態度は既に一八四三年に於いて明かなるが如く、其が人間の藝術の尊貴と結びつけらるゝに至れるは要するに彼の當然の経路又は

發展である。人の一生涯、その人の事業の一轉機を何處に求め定む可きやは難事である。従つて一八四五年が自覺せるラスキンの生涯を生み出せるものとして特筆せらる可きは異論なき所であらう。併し一八四三年の著作の繼續を以て上、述べたるが如くに解するは、然かも一八四四年三月十日 Google 宛の手紙丈けを以つて、聊か早計たるに當該書翰の眞義に就いて多少の疑義を懐かしむるものがある。

附記 續稿の豫定なるも一先づ之れを以て完結とする。

チュードル、スチュアート

ト兩朝に於ける工業政策

策 (四・完)

高木 壽一

七

一五六三年一月制定せられたる Statute of Artificers に於ける重要な部分をなすものは徒弟に關する規定並に賃銀公定に關する規定であ

該條令に於ける徒弟規定の目的とする所は、青少年者が適當に訓練せられ、諸産業に對する少年職工の供給過多を防ぎ、雇主に對する適當なる勞働の供給を得、且つ一階級より他階級への自由なる移動を防止するによつて現存の社會的分岐を維持せんとしたるものである。

第一に、總べての工匠は都鄙を問はず正規の徒弟修業をなすべく、其期間を最短七箇年としたることは當時多くの地に於て行はれ居たる修業期間を延長すること大なるものであつた。此條令以後、田舎に於ける工匠は最早、都市工匠よりも短期間に修業せしむること不可能となり、都市工匠の受けたる不利益を排除せんとした。尙同規定は都鄙により少年に對する職業選擇の規定を含む。即、自治都市に住むと、自治權なき市場地に住むと或は又田舎に住むとに由

り、及其父母の職業的及財産的資格に由りて子弟の職業選擇の自由を拘束し、以て當時都鄙の利害の相容れざりし點を緩和せんとする。而も少年が農事に徒弟となり、或は鍛冶工以下、自家用織物織匠等に至る田舎生活に必要な職に徒弟たることは自由なりとせられた。加之、少年が當時現存せし職業を營むには必ず七年間の徒弟修業を必要なりとせることは同じく職業轉換に對する新なる障害を興ふるものであつた。

(本誌前號抽稿一四九頁)
(二一) (七) 參照

右の諸規定の中には明に、既にヘンリー八世の時代よりエリザベス即位に到るまでの間に於て常に増加せる諸法制の目的とせる所と同じく田舎に於ける工業に對して都市工業を保護せんとするの意を認める事が出来る。而も一般工業と異りて、其市場の廣大なる、從て生産組織の最も進歩せる、或は資本主義的利益の有力なる、織

物關係の諸業に就ては既存の法制(例令、一五五五年 Weavers' Act 本誌十六卷五號抽稿參照)と極めて異なる態度を示す。例令、Weavers' Act に於ては「都市 (City, borough, town corporate or market town) 外に住む織匠は同時に二人以上の徒弟を有すべからず」とせられたるに、此徒弟條令に於ては、織物關係の諸業並に靴匠の職を營むものに對しては、徒弟の數と巡回職人雇傭數との間の所定の割合を遵奉する以上、徒弟雇傭數に何等の制限をも加へて居ない。(前號一四九頁(16)參照) 此規定は從て都鄙の機業家 (Clothier) の利益に應じ、且つ巡回職人或は小親方工匠等の利益を害することの少ならんことを期したるものである。而も既に記せる如く之等の大工業に於ては特權的都市を離れ次第に田舎に移りて、自由と低廉を求めつゝあり、即工業地域の擴大と移動、工匠と商人の職分の分離及大生産方法